大阪インターナショナルチャーチ　　ダン・ペリー師　　**2015/02/22**

大きいことにくよくよするな

士師記 **4:1-10**

今日、みことばを取り次がせていただけることを感謝いたします。皆さんとお分ちする内容が、この世で生きていく上で励みとなればと願います。世界中にも、私たちの身近にも、多くの問題が起こっています。そういった問題について絶えず考えていると、気が滅入ってしまいます。または、社会問題で頭がいっぱいになり、身近なことがおろそかになるかもしれません。

今日の聖書個所は、ある素晴らしいできごとの序章です。デボラは勇気ある女性でした。神は、イスラエルの民のために奇跡を行うようデボラを導かれました。誰が読んでも勇気づけられる個所ですが、とくに女性にとって、力をもらえるみことばだと思います。今日は時間が限られていますので、このお話の最後まで読むことはできませんが、どんな結末だったか覚えていない人は、ぜひ各自でお読みください。今日はこの最初の部分から、いくつか知恵をいただきたいと思います。ではお読みしましょう。

士師記 **4:1-10**

4:1 その後、イスラエル人はまた、【主】の目の前に悪を行った。エフデは死んでいた。 **4:2** それで、【主】はハツォルで治めていたカナンの王ヤビンの手に彼らを売り渡した。ヤビンの将軍はシセラで、彼はハロシェテ・ハゴイムに住んでいた。 **4:3** 彼は鉄の戦車九百両を持ち、そのうえ二十年の間、イスラエル人をひどく圧迫したので、イスラエル人は【主】に叫び求めた。 **4:4** そのころ、ラピドテの妻で女預言者デボラがイスラエルをさばいていた。 **4:5** 彼女はエフライムの山地のラマとベテルとの間にあるデボラのなつめやしの木の下にいつもすわっていたので、イスラエル人は彼女のところに上って来て、さばきを受けた。 **4:6** あるとき、デボラは使いを送って、ナフタリのケデシュからアビノアムの子バラクを呼び寄せ、彼に言った。「イスラエルの神、【主】はこう命じられたではありませんか。『タボル山に進軍せよ。ナフタリ族とゼブルン族のうちから一万人を取れ。 **4:7** わたしはヤビンの将軍シセラとその戦車と大軍とをキション川のあなたのところに引き寄せ、彼をあなたの手に渡す。』」 **4:8** バラクは彼女に言った。「もしあなたが私といっしょに行ってくださるなら、行きましょう。しかし、もしあなたが私といっしょに行ってくださらないなら、行きません。」 **4:9** そこでデボラは言った。「私は必ずあなたといっしょに行きます。けれども、あなたが行こうとしている道では、あなたは光栄を得ることはできません。【主】はシセラをひとりの女の手に売り渡されるからです。」こうして、デボラは立ってバラクといっしょにケデシュへ行った。 **4:10** バラクはゼブルンとナフタリをケデシュに呼び集め、一万人を引き連れて上った。デボラも彼といっしょに上った。

イスラエルの民にとって、困難な時代でした。神は、乳と蜜の流れる土地を民に与えて祝福されました。また、民に簡単な掟を言い渡されました。民がすべての掟に従って生きれば、天下泰平です。食べ物は十分あり、子どもたちは強く元気に育ち、平和な世の中に暮らせます。しかし、イスラエルの民は神に従うこともあれば、従わなかったこともあったと、歴史が物語ります。彼らは、浮き沈みの激しい人々でした。私は以前、彼らの様子を読むたびに、こう思っていました。なぜこんなにバカなのだろう。神の言うとおりにしていれば、すべてうまくいくのに、それがわからないのだろうか。神に逆らうと必ず罰を受けたのだから、ずっと従えばいいのにどうしてそうしなかったのだろう。

そして気づいたのは、イスラエルの民がそうだったように、現代のクリスチャンも神に従えたり従えなかったりするということです。神は民全体を懲らしめられましたが、現代のクリスチャンも神のみこころを避けるなら、同じように懲らしめを受けます。人を従わせたいという征服欲からではありません。神が私たちに命じられることは私たちにとって良いことだからです。それがどれほど私たち自身のためになるか、私たちは気づいていないだけです。子を愛する天の父として、神は私たちを懲らしめられるのです。

イスラエルの民は、ふたたび不道徳な行いへと堕落しました。1 節には、「【主】の目の前に悪を行った。」とあります。この「悪」とはたいていの場合、偶像を礼拝すること、安息日を軽んじること、恵まれない人を助けないことを指していました。それで神はハツォルの王ヤビンを通して、民を懲らしめられました。

私たちが自分の子を躾けるときは、説教をしたり、座っているよう言いつけたり、手にしっぺしたり、何かを取り上げたりします。お尻を叩くこともあるかもしれません。神が民を懲らしめる、つまり躾をなさるとき、神は異邦人の侵攻を許し、民が収穫や家畜を取られて税を払わなければならないようにされました。

ヤビンには、優秀な将軍シセラがいました。シセラの名前がわざわざ登場することを考えると、彼は戦術に長けていたのでしょう。彼は、自身が優れた将軍だったことに加えて、精鋭の大軍を従えていました。ハツォル軍は、技術面でイスラエルの民をはるかに超えていました。イスラエルの民には、剣がありましたが、とても十分ではありません。一方、シセラには戦車がありました。それも、900 両です。シセラは、900 両の鉄の戦車を持っていました。

戦いにおいて、戦車があるとないでは大違いです。戦車の形状や大きさはさまざまですが、この画面に映っているものは、馬 2 頭で引くタイプだと考えられます。兵士 2 人が乗り、ひとりが戦車を操縦し、もうひとりが弓矢を使って敵を打ちます。近くの敵には、槍を使うこともできました。戦車があれば、戦場を駆け巡り、敵兵の間を走り抜けたり、敵兵から離れて矢を打ったりできます。

この戦車を横一列に並べて戦いに臨めば、900 両だと 1 キロメートル以上の距離に及ぶでしょう。歩兵のみの軍に勝ち目はありません。歩兵は、遠くから矢に打たれ、近づけば馬に踏みつけられるか、戦車に轢かれるか、剣で切り付けられます。歩兵が戦車に対抗するすべはありません。その破壊力は怒涛の勢いです。

とは言え、それは平地での戦いの場合です。シセラは平地を支配していたので、イスラエルの民は、街道を通らずに山道を隠れるように行き来しなくてはなりませんでした。民全体が危機に直面していました。ヤビンとその将軍シセラに圧迫された暮らしを強いられ、空腹で救われる見込みもありませんでした。助けてくれる同盟国もありません。

今日の私たちも、ある意味で危機に直面しています。世界各地で起こる痛ましいニュースを毎日耳にします。中東に住むクリスチャンは、ただクリスチャンであるというだけで標的とされ、残虐な方法で殺されています。そのようなことは中東以外でも起こっていますが、私たちの耳に入らないだけです。テロ集団は、自分たちの存在を誇示するためだけに、罪のない人々を無差別に攻撃しています。

私たちは、霊的にも社会的にも、危機に直面していると言えるでしょう。一家離散や家庭崩壊が多く見られます。家庭内に愛情や安定がありません。虐待のニュースは絶えず、夫が妻に暴力を振るうケースが取り上げられます。しかし、明るみに出ているのは氷山の一角でしょう。不安定な家庭環境で育った子どもたちは、社会に出ても無責任だったり暴力的になったりします。漠然とした虚しさを感じながら育った彼らは、自己価値が低いからです。戦車に乗った敵が挑みかけてくる社会で、私たちはクリスチャンとして何をすべきでしょうか。

デボラについてもう少し詳しく見ていきましょう。そして、彼女の生き方から何か学べることはないか考えましょう。まず、デボラはどこにでもいそうな人でした。女王や王女ではありません。一方で、彼女は神を敬う女性でした。神と過ごす時間を持ち、祈りをささげ、神の御声に耳を傾ける人でした。神はそんな彼女に語りかけられました。デボラは預言者として知られていました。もし何か悩み事があって、神からの知恵が必要なら、デボラのところに行くのです。そうすると、神に代わって彼女が答えてくれるのです。

ヤビンや将軍シセラの圧迫に、デボラも心を痛めていたことでしょう。なぜ神は、ご自身の愛する民イスラエルをこのような目に遭わされるのでしょう。民が悪を行っていたからです。神は躾のために、民を懲らしめておられました。このことについて、デボラには何ができるのでしょうか。

彼女はどうすればよいのでしょう。私たちは、周囲で問題が起こった時に、どうすればよいのでしょうか。世界平和のために募金を募る団体を立ち上げればよいのでしょうか。平和を訴えるデモに参加すればよいでしょうか。悪い行いに対する新しい法律を作ればよいのでしょうか。

デボラのしたことは、祈ることと、神に与えられた役目を果たして神に従うことでした。デボラは、平和を作る人としての役割を続けました。人々の相談内容に耳を傾け、知恵のある助言をします。これは善いことですが、イスラエルの民全体にどう役立つというのでしょう。

私たちは世界を変えたいと思ったりしますが、神は、私たちに与えられた日常の事柄を忠実にこなすことを望まれます。それが、神が私たちに課された役目なのです。

ですから、デボラから学ぶべき第一のことは、神から与えられた役割が何であれ、それを忠実に行うことです。私たちが望むような世界の変化を起こすのには貢献していないように思えても、そうするのです。

あるクリスチャンの教師が特別集会に招かれたときの経験談を以前読みました。彼が到着すると、それぞれ与えられた役割分担リストを見つけました。全体集会の説教や、グループディスカッションのまとめ役といった役割がある中で、彼の担当は、オーバーヘッドプロジェクターのフィルム掃除でした。

透明フィルムのロールがついた旧式のオーバーヘッドプロジェクターをご存じの方もいらっしゃるでしょう。小さいハンドルを回すと、ロールのフィルムがスクリーンで流れていきます。フィルムが書き込みでいっぱいになったら、ハンドルを回して新しいフィルムをスクリーンに出します。後でフィルムを拭いて書き込みを消せば、フィルムは何度でも使えます。

これは、清掃係のする仕事です。この教師は、自分が正当に評価されていないように感じました。自分はもっと重要な役割をあてがわれるべきだ、と不満に思いました。その週、彼はずっと不機嫌なまま過ごし、フィルム清掃の役割分担もいいかげんにしていました。そして週も終りに近づいたある日、全体集会で説教者が語っていました。説教者は要点を書こうとオーバーヘッドプロジェクターのスイッチを入れました。新しいフィルムを出そうとハンドルを回しますが、回りません。フィルムの最後まで使い切っていたのです。説教者はハンドルを逆に回しましたが、出てきたのは、すでに書き込みでいっぱいになったフィルムだけです。しばらくハンドルを回し続けましたが、新しいフィルムが出てこないので、説教者はついにあきらめました。

クリスチャンの教師は、自分が役割をちゃんと果たさなかったことに気づきました。とても簡単な仕事なのに、していなかったのです。こうして、大衆の前で、自分の不注意がさらされることになりました。神が私たちの目の前に与えられることを忠実にするのは大切です。それが、どんなにささいなことに思えてもです。

皆さんの身近にもこのようなことがあるでしょう。職場や家庭ではどうでしょう。炊事、洗濯、子どもの話を聞く、友だちの話に耳を傾けるなどでしょうか。教会ではどうでしょう。礼拝に行く、献金する、励ます、誰かに何かを教えてあげるなどいろいろあるでしょう。これらのことはすべて、神の目に大切な事柄です。新約聖書には、このようなみことばがあります。**コロサイ3:23 「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。」**神があなたに与えてくださった小さなことを忠実に行い、大きなことは神にお任せしましょう。

次に、神はデボラにビジョンを与えられました。デボラ自身の考えではありません。神のお考えです。神は私たちに、大切な務めを与えておられます。あることの必要性について神は私たちの心に示されます。そして、それを実現する方法を示してくださいます。私たちは、それに従わなければなりません。

アリス・グレイが編纂した「心に効く話」には、ある実話が載っています。アリス・グレイとは違った観点からそのあらましをお話します。第二次世界大戦直後のイスラエルで、宣教師として働く若い女性がいました。彼女が公園を歩いていると、薄汚いやつれた老人がベンチに座っているのに気付きました。彼は悲しそうな目をしていました。この男性に話しかけるのが神の望まれることだと感じ、彼女は男性に近づきました。彼女に気づくと、老人は低くうなるように「何の用だ」と言いました。彼女は答えました。「私はもともとこの公園に来るつもりではありませんでした。バス停を間違えて降りると、あなたが目に入ったのです。ずいぶん悲しそうなお顔でしたから、何も言わずに通り過ぎることができませんでした。」

「なら、バスに乗ってさっさと消えろ。放っておいてくれ」と男性は鋭い口調で返しました。

「あなたのもとに来るのはとても不安でした。でも、バスに乗る前に、神があなたに何か言うよう私の背中を押しておられるように感じるのです。うまく言えないのですが、イエスはあなたのことを愛しておられます。本当です。」

男性は、この言葉に驚きました。何の苦労もなさそうな若い女性が、「神はあなたを愛しておられる」と言うのです。そのずぶとさに腹が立つやら、健気さに感心するやらで、自分の気持ちが分からなくなりました。彼女をふと見ると、その頬には涙が伝っています。それを見た男性も泣きだしてしまいました。

この女性はもちろん、彼の人生にどんなことがあったか知りませんでした。彼は戦前、東ヨーロッパで裕福に暮らすユダヤ人でした。妻はユダヤ人ではありませんでした。ナチスが侵攻してきたとき、自分は大丈夫だと思っていましたが、ある日突然、彼を連行しにナチスがやってきました。妻が警察官と不倫関係になり、彼をナチスに渡したのです。それから 5 年間、彼は牢の中で苦しみ、恨みを募らせました。戦争が終わり、自由の身になると、故郷に帰って息子を探しました。息子夫婦はもうそこにはいませんでした。こうして、彼は公園で寝泊まりするようになりました。今度は、警察官が彼を保護し、兄弟のいるイスラエルのテルアビブに送りました。兄弟の家に着いたころには、5 日間も何も食べていませんでした。体調も悪く、体はげっそり痩せていました。すっかり変わった彼を見た兄弟は、彼がその人だとわからなかったのでしょう。身分証明書を持って出直してくるようにと言いました。もうすべて終わったと失望した彼は、死ぬ覚悟で公園に行きました。若い女性が話しかけた時、男性はすでに数日間、そのベンチに座っていたのです。

彼女が男性に話しかけたことで、彼の心の奥底から信じる気持が湧いてきました。彼は女性といっしょに祈り、神に助けを求めました。彼女は、自分がお世話になっている家に男性を連れ帰り、そこの家族は男性が元気になるまで看病しました。この男性はその後、兄弟ともちゃんと再会し、仕事を見つけて、アパート暮らしを始めました。彼は、天国に行ったら、みんなに水を渡す係になりたいと言います。イエスがしてくださったことに対して、自分ができるたったひとつの恩返しだそうです。何よりも驚いたことは、あの若い女性が正しかったことだと、言います。「イエスは私を愛しておられます。本当にそうなのです。」

間違ったバス停でバスを降りたあの日、彼女はただ日常の用事をこなしていただけです。神に与えられたことをしていたのです。けれども、その日常の中で、特別な形で神によって用いられる準備が彼女はできていたのです。ベンチに座る浮浪者に話しかけるよう神に示されると、彼女はそれに従いました。

デボラと同じです。まず、神が与えられた日常の用事を忠実にこなし、次に、特別な務めを神に与えられると、それに従いました。

三番目に、デボラは示されたことを確信し、適切に動くことができました。デボラは、イスラエルをシセラから救うことを神が望まれていると確信していました。自分で軍を集めようとすることもできたでしょうが、そうはせずに、神が召された男性バラクのもとに行きました。手柄を自分のものにしようという思いは、デボラにはありませんでした。手柄は誰のものでもよいのです。彼女は一心に神に従い、正しい方法でそれをなそうとしました。

私たちは、イライラしてしまうことがあります。何か成し遂げなければならないことがあるのに、他の人たちの協力を得られないことがあります。そういう人たちは差し置いて、早く物事を進めたいと思います。デボラにとって、それはバラクでした。バラクは、デボラが携えた神からのことばを信用していない様子でした。

バラクは、デボラが一緒に行ってくれたら行くと答えました。これは、あまり良い応答ではありません。この態度に、デボラのことばに対する、さらには神の救いに対する疑いが表れています。それでもデボラはいっしょに行くことに同意しました。ただし、勝利の手柄は彼のものにならず、女性が得ると警告しました。戦いにいっしょに行ってほしいと女性に頼むなら、女性が勝利を得ることになる、というわけです。

デボラはバラクに苛立ったでしょうか。バラクは信仰があるようには見えませんでした。彼は条件付きで、神に与えられた務めを行いました。デボラにすれば、そんなバラクを非難し、もう行かなくてよいと言いたくなったかもしれません。けれどもそうはせずに、バラクといっしょに戦い、神が勝利をもたらしてくださることを信じました。

私たちも壁にぶち当たることがあります。神から与えられた務めがあると確信していても、人や状況に阻まれてそれをできないことがあります。そんなとき、どうしますか。こういうときこそ、私たちは気をつけなければなりません。正しいことをするだけでなく、正しいやり方でそれをするように注意が必要です。

1994 年、私は日本のある宣教団体の主事でした。当時、私たちの団体に加わった韓国のある教会グループと関係を築いたところでした。韓国では教会が霊的に燃えていました。そんな霊の炎が日本にも広がればと私たちは願っていました。ある韓国人の女性牧師が宣教師として来日することを希望していました。私は、素晴らしいアイデアだと思いました。これこそ私たちの必要としていることだと思いました。ちょうどそのとき、それより 10 年ほど前に宣教師が開拓した小さな教会が牧師を探していたのです。その教会が礼拝していた家の賃借契約は、その宣教団体が交わしていたので、宣教団体の主事であった私には、自分の考えに沿って事を運ばせる力がありました。

今でも、伝道委員会の会議で話し合われたことを覚えています。今思い返すと、自分のやり方がとても恥ずかしいです。日本人の委員メンバーは、韓国からこの女性を招聘することに二の足を踏んでいました。私は、これが天から与えられた絶好のチャンスだと思っていました。委員全員で決議することになっていましたが、私は宣教団体の主事の権力を行使しました。委員のメンバーたちは、懸念事項を挙げました。メンバーたちは、この女性が来ることに反対ではありませんでしたが、そこで話し合われていた教会とはうまくいかないのでは、と考えていました。それでも私は自分の意見を押し通しました。それが必要だと信じ込んでいたのです。

私が望んでそう働きかけた通り、韓国人牧師がやってきて、その教会の牧師となりました。けれども、思ったようにうまくいかず、結局その教会は閉鎖することになりました。韓国から宣教師を招聘するのは正しい判断だったかもしれませんが、やり方がまずかったのです。彼女がその教

会で用いられることを私が強く推したせいで、その教会は傷つき、私たちの団体の韓国支部と日本支部の関係にも影響が及びました。

今考えれば、伝道委員会ともっと協力して辛抱強く話を進めるべきでした。私はよいアイデアがありましたが、委員会には皆が持ち寄った知恵がありました。自分の考えを委員会に押し付けるべきではありませんでした。デボラは、辛抱強くバラクと話し、イスラエルの軍を召集するよう勧めました。バラクが弱腰になって躊躇した時、デボラはバラクにもういいと言って自分で事を進めることもできました。しかし、バラクと協力し、最終的にはイスラエルに大勝利がもたらされました。

デボラは、正しいことを正しいやり方で行いました。苦境の時代にデボラが忠実であったように、私たちも苦難の時代を忠実に生きたいものです。そうするためには、次の 3 つのことを心に留めておきましょう。1）ささいなことに思えても、目の前に置かれたことを忠実に行う。2）神の導きに日々耳を傾け、特別な務めが与えられたらいつでも従えるよう備えておく。3）正しいことを正しいやり方で行う。そして、最後にはすべてを正してくださる神を信頼する。

そうすることで、私たちは心も思いも平安になり、神に栄光を帰することができます。